


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員(主査) 富盛伸夫 

論文題目 現代日本語における「-は」「-が」の意味と機能

氏名 あさやま 浅山 ゆき 友貴

1. 研究の意義と位置づけ

日本語助詞の「は」と「が」に関する研究は、すでに明治以前から現代に至るまで膨大な蓄積をもち、既に大方の論点が提出され議論は尽くされているかのような印象が持たれる一方で、三省堂の『言語学大辞典』第6巻「術語編」の「主語」「主題」などの項目で見られるような情報構造上の次元の差異として簡略的に把握されているきらいがある。しかし、先行研究をつぶさに検討すると、議論の範囲は自動詞文、特に存在文、そして構文的には名詞述語文と形容詞述語文（一ハーガのタイプの文）に集中しており、例えば他動詞文に関する検討は取り残されてきた。

「は」「が」の意味・機能の差異が顕著な構文については「主題」と「主格」という談話・情報構造上の次元の違いを強調することで説明してきた従来の研究に対し、差異のあまり顕著に現れない他動詞文や複文の主文、単文のある種のものについては、論者によれば、次元の違いに求めるのではなく統一的な説明原理を新たに設定する方が妥当であると考えられる。

この問題意識は、論者の日本語教師としての現場経験から、「新・旧情報」「焦点化」「話題化」といった従来の説明の仕方ではほとんど無理があり理論が実用に結びついていないという不満からも強められており、実際の日本語教育の教室でも応用可能な説明原理を探求することも動機となっている。

本論文の目的は、現代日本語において「主格」として機能する「は」と「が」との間に次元の差異や機能的分担を強調して処理するのではなく、むしろ共通領域を求めてその中で統一的解釈を可能とする仮説を立てて検証しようというものである。第一段階は複文の構文論上の観点から両者の「係り結び」機能の分担として説明されており、第二段階は話者の発話時の「空間認識」という仮説を導入して文の意味把握に応じた選択原理が働くことを説明しようとしている。

そこで本審査委員会は、一般言語学の立場から三谷恭之教授と主査富盛伸夫、認知心理学の立場から田島信元教授、日本語学の専門の立場から早津恵美子助教授、そして日本語教育の観点からの審査では鮎澤孝子教授という構成で多様な視点から審査を行い、去る平成11年11月18日に最終（口述）試験を経て、別紙の評価を与えた次第である。

2. 論文の構成と論旨

本論文は研究目的・動機・手順等を述べた序論の他に8章と、参考資料、参考文献等から成りA4版（45字・33行組）で285ページの分量に達している。第1章では「は」「が」の対比に関する研究史を整理し、現在定説となっている主要な論点を提示した上で、論者の立場（日本語研究に「主語」の概念が有用なこと、双方の次元の違いを越えて話者の選択には共通の領域を設定することの有利なこと、等）が明示されている。第2章では語順規則の異なる屈折的言語を背景にしたプラグ学派的FSP（機能論的文構造）理論を日本語助詞研究に適用し情報構造のみから解明することの批判作業を通して、両助詞を文主語としても機能しうるものとして分析することの有用性を主張する。同時に、「主題」「主語」「主格」といった術語の定義と整理を行っている。

第3章が本論文の核心とも言うべき章で、論者は統語的な関係を表すために必要な仮説(1)と、意味的な差異を表すために必要な仮説(2)の、2つの作業仮説を設定する。まず、複文で主語としてみられる2つの名詞項が並列してある場合、統語関係の明示のため「は」「が」が機能分担しているという解釈を「仮説(1)」としておく。

次に、単文の場合、主語に「中立的なもの」と「中立的でないもの」という意味内容に関わる「は」「が」の役割分担をみる。これを「仮説(2)」とおき、話者の捉える空間認識的なモデルを立てて「単独構造」(「は」が用いられる)「集合構造」(「が」が用いられる)との区別によるケースを設定する。

さらにそこに「認識者」が関与する文の場合には、「認識者を積極的に主語として提示する場合：「は」の使用(ここに「が」を使用すると指定的な意味が生じる)」と「認識対象を積極的に主語として提示する場合：「が」の使用(ここに「は」を使用すると対比的な意味が生じる)」を示すように機能分担するケースを分類した。つまり、「単独構造」「集合構造」「認識者」「認識対象」という4つのパラメータで、従来の「対比性」「指定性」といった主語の意味表示機能をも統合的に説明しようとしている。

それに続く第4章では名詞文、第5章では形容詞文、第6章では自動詞文、第7章では他動詞文について2つの仮説が実証されるかどうかの検討を行っている。第8章では結論として以上を総合的に再検討した後、本論文の適用範囲と限界、術語上の問題、ゼロ助詞や「を」「も」などの他の助詞についての考察が欠けていることなどに反省を加えるとともに、上記の日本語教育への実践的検証の可能性についても抱負を述べている。

3. 論文としての問題点と評価

総じて、審査委員会は、論文として各章ごとに目的と総括が示されていること、仮説の設定や検証のプロセスが段階的に構成されていること、限界や反省点も明示されていることなど、形式的に明確に論旨が展開されていることを確認した。コーパスに関しては、第4章から第7章の検証の部分で新聞、雑誌、小説、シナリオなどから多彩な文体のデータをCD-ROMも活用して収集していることも評価された。先行研究が関与的に参照され、再検討され、一部には問題点が指摘されたものの概ね適切に引用されていることも確認された。

ただし、問題点として指摘を列挙すると以下のようなものである。論者の先行研究の取り上げ方について、恣意的と見られる側面があるので、公刊までには手直しが必要となること。多量のデータから仮説を帰納的に検証し、しかも網羅的に説明しようとしているために例文・用例が多く多少読みづらい点があること。形容詞述語文では、さらに多様な述語形容詞を検証すべきであることなどが指摘された。本論文が言語学論文としてとらえると文法論としての厳密さに欠く点について、論者の関心においては、話者の発話時での文内容と状況の認知的把握を手がかりに、この日本語学上の難問に挑んだのであって、その独創性と意欲を評価する意見があった。確かにこれを言語学の統語論研究としてみると若干徹底を欠いているとも思えるが、本論文の趣旨からは日本語の構文解析を精密化するというよりも、教育文法と位置づけられる観点から学習者のために整理して見せているという評価もできる。

4. 将来の課題、および総合的評価

本論文の視点は従来の研究成果に対して部分的に修正を迫る新たな切り口を提供しているが、本研究の範囲では、「は」が同時に別の次元で「主題」の機能も持ちうることや、文構造以上の領域で機能している、という通説を否定するものではなく、統語分析の限界を別角度から越えて実践的解釈の新たな視点を提供したものと見える。

また、同様に、「が」が「主格」や連用修飾語なみに節内部で働く場合がある、という事実を否定するものでもない。ただ、日本語学習者に与えられる「主題」による説明、次元や領域の違いによる説明では現実に混乱・混同を生んでいる以上もはや不十分であることも明らかにされている。

本論文で提案された仮説による説明原理から、実際の教材を作成し「浅山方式」の実践を是非とも行って、その結果を評価することにより、さらに修正・発展させて一層の精密化と実用化をはかってほしい、との期待も複数の審査委員から強く表明された。

以上を総括して、本論文ではこの研究領域で自立した研究者として継続してゆける執筆者の資質の一端が示されていること、また、今後一層の応用範囲と実践的展開を期待させるものとして評価できることから、本大学院博士課程論文として十分な要件を満たしていると結論した。